住民とともに進めるまちづくりに向けた総合計画のあり方

都市計画事業部・クリエイション事業部　佐藤 陽

みんなで未来をつくる計画を目指して

近年、総合計画は、事細かにまちの取組を記載していく役割を個別計画に委ね、本来の行政の指針だけでなく、自治体が「どんなことを目指して」「どんなことに取り組もうとして」「それが住民の暮らしとどうつながっているのか」その自治体で暮らす人と共有し、まちづくりに理解と協力を得るための“教科書”としての側面も大きくなっています。

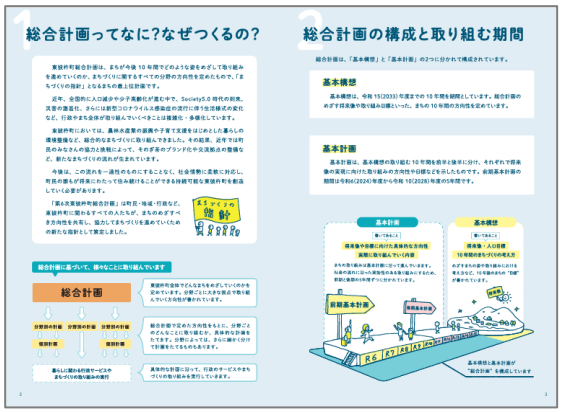
総合計画においては、策定において住民参画や住民の声の反映を求められることも多くなっていますが、せっかく住民の声を聞く手法を取り入れたとしても、それがどのように生かされているのか、難解な文章を読まないとわからない計画では、住民のまちづくりへの興味や参加意欲を持続させることはできません。

住民はまちの未来をともに担う重要な存在であり、住民に伝わる計画をつくることは非常に重要です。そのうえで、難しい語句や言い回しの多いこれまでの「行政の伝え方」では、住民にまちの思いを届けることは難しく、総合計画においてはこれまでのまちづくりの取組を受け継ぎながら、計画の記載や編集においては思い切った見直しも必要であると思っています。

伝わる言葉で表し、ゆとりを持ってまとめる

長崎県東彼杵町では、総合計画を行政だけでなく、住民にも見てもらい、まちづくりを自分ごととしてとらえてもらえるよう、「中学生がまちづくりについて理解できる」計画を目指して策定を支援しました。町民ワークショップや職員のプランニングを織り交ぜながら策定を進め、それらを計画としてまとめるにあたって、随所に「伝わる工夫」を施しています。

まず、目次の構成については、従来の「計画策定の趣旨」や「社会動向」といった堅苦しい見出しを使わず、「総合計画ってなに？なぜつくるの？」といったような見出しを採用するとともに、総合計画の構成として変更できない「基本構想」「基本計画」などについては、それぞれにどんなことが書いてあるのか解説を設けました。



また、まちの現状に関するページについても整理を行い、グラフと文章が続く一般的なものから、統計資料から最も伝えたい情報を選別し、シンプルに要点をまとめたかたちで掲載しています。

基本計画部分においては、「まちのみんなで取り組むこと」を記載し、行政の取組と住民の暮らしの関連性を感じてもらえるような工夫をしました。結果的に掲載できる行政の取組は減少していますが、まちの大きな指針としての取組の整理を併せて実施することができ、計画全体の記載内容の大小をそろえることにもつながっています。

細かな部分でいえば、用語解説についても一つひとつが本当に解説となっているか、難しい言葉を補足できているのかといった配慮のもので構成を行っています。

そして、これら全体のゆとりを持たせたレイアウトで構成することで、読み手に負担のない、伝わる計画となるよう心がけました。要所要所でイラストや写真を入れ込んでおり、まちのキャラクターと住民との掛け合いのイラストなど、本来の目的でなくともふとした時に開いて眺めたくなる計画書となるようにしています。

人に伝える心がけの大切さ

策定後、庁内外において「まちの取り組みがわかるようになった」と評価をいただくとともに、同じようなご希望のある他自治体でも「この計画のコンセプトをベースに策定したい」と好評をいただいております。

人口減少・高齢化の進む自治体が増加しているなか、今後よりまちづくりへの理解と参画は重要視されることと思われ、総合計画はこれまでの行政職員や関係者だけで共有できればよかった計画から、まちのみんなで未来をつくるための計画へと変化していくことも考えられます。これまで以上に多くの人に手に取ってもらうために、計画書の文章表現や構成を含め、自治体としての「伝え方」を改めて見直すことは、思っている以上に重要な視点なのかもしれない、と思っています。

あなたの自治体の計画でも、「誰に伝えたい計画なのか」「その相手に本当に伝わっているのか」一度立ち止まって考えてみることが、これからの計画づくりにおいて必要なのではないでしょうか。